原 著 論 文

補綴科受診患者における全身的合併症に関する調査

高端 泰伸 岸本 幹哉 野首 孝祠 奥野 善彦

General Complications of the Patients at Our Prosthodontic Clinic

Yasunobu Takahashi, Mikiya Kishimoto, Takashi Nokubi and Yoshihiko Okuno

Abstract : The 559 patients who visited our prosthodontic clinic during one year (1988) were evaluated for their general complications by collating informations gathered with a questionnaire and a physical examination. Our research indicated that 76.6% of the elderly patients (over 65 year-old) suffered from multiple diseases and that their major health problem was a circulatory disease. It was suggested that attention to general complications and following intraoral findings, especially in the elderly patients, was necessary to be paid before the prosthodontic treatment.

Key words : medical questionnaire, general complication

I. はじめに

大阪大学歯学部附属病院では歯科治療に先立ち、患者の全身状態を把握するため、カルテ作成時に健康調査表とよばれるアンケート用紙を配付し、患者の健康状態に関する質問に対して原則として本人が直接記入したものをカルテとともに保存し、さらに各診療科においては、問診担当医がその健康調査表を参考にしながら問診を行い、カルテにその結果を記入するという方法を採用している。本学第二補綴科では、主に義歯患者を対象としているため、他科に比べるとその患者群に多数の高齢者が含まれている。一方、年齢が増すにつれて全身的合併症の既往が増すことが高齢者の歯科医療の問題点の1つとしてあげられており、このような患者の歯科治療にあたっては、治療に際して疾患が増悪しないよう配慮する必

要がある。また、大学病院という特殊性を考えると、歯科治療に際して全身状態に特別な配慮を必要とする患者が医科より紹介されてくることも多く、その処置に先立ち全身状態を十分に把握する必要がある。

そこで、当科における初診患者の全身的合併症の罹患状態を調査することにより、大学病院補綴科における年代層別の全身的合併症に関する実態を明らかにすることを目的として本調査を行った。

II. 調査対象ならびに調査方法

調査対象は、昭和63年1月4日より同年12月28日までの1年間に大阪大学歯学部附属病院第二補綴科を受診した患者559名（男性213名、女性346名・平均年齢 47.2 ± 18.3 歳）とした。調査方法は、大阪大学歯学部附属病院の健康調査表への記載と、補綴科予診で当科医局員が行った問診によるカルテへの記載とを総合的に判断して、全身的合併症に関する項目を集計した。主な調査項目は表1に示したとおりである。

大阪大学歯学部歯科補綴学第二講座（主任：奥野善彦教授）
The 2nd Department of Prosthetic Dentistry, Osaka
University Faculty of Dentistry (Chairman : Prof. Yoshihiko Okuno)
平成3年1月31日受付

表 1 今回行った調査項目

- [1] 現在までに手術の経験があったかどうか
 [2] 現在、医師より投薬を受けているかどうか
 [3] 現在までに全身的合併症の既往があったかどうか。既往があった場合、その全身的合併症の病名

図 1 調査対象の治療内容 (%)

図 2 手術経験の有無 (%)

III. 調査結果

調査対象を 40 歳未満 (合計 182 名, 男性 71 名, 女性 111 名), 40 歳以上 65 歳未満 (合計 274 名, 男性 100 名, 女性 174 名), 65 歳以上 (合計 103 名, 男性 42 名, 女性 61 名) の 3 群に分けて, 調査結果を集計した。

全身的合併症の調査に先立ち, 今回の調査対象において必要とされる補綴治療の処置内容を歯冠修復のみを必要とする患者群, 歯冠修復の前処置ののちに部分床義歯を必要とする患者群, 全部床義歯を必要とする患者群の 3 群に分類し, 集計した結果を図 1 に示した。年齢とと

図 3 投薬の有無 (%)

図 4 全身的合併症の既往の有無 (%)

既往ありの数字は既往のあった疾患数を示す

もに有床義歯患者が増加している。

調査項目 [1] では, 現在まで入院を必要とする外科手術を経験している者, 手術の経験をもたない者, 健康調査表ならびにカルテへの記載がなく不明な者の 3 群に分類し, その調査結果を図 2 に示した。

調査項目 [2] では, 調査項目 [1] と同様に, 現在投薬中であるかどうかと不明の 3 群に分け, その結果を図 3 に示した。調査項目 [1] と同様に年齢の増加とともに投薬を受けている者の数が多くなっているが, 手術の経験者に比べて年代層による違いが大きかった。

調査項目 [3] では, 過去ならびに現在において全身的合併症の既往歴があった者, なかった者と不明な者の 3 群に分け, さらに既往のあった者のうち, 1 疾患のみ, 2 疾患, 3 疾患以上の全身的合併症をもつ者の 3 群に分け, その結果を図 4 に示した。年齢の増加とともに既往のある者が増え, 複数疾患の既往のある者が増える傾向を示した。

臓器別にみた全身的合併症の既往歴を図 5 に示した。40 歳未満の層にアレルギー・蕁麻疹の割合が多く認められたのに対して, 65 歳以上の層では循環器系疾患と消化器系疾患の割合が多く, 特に 40 歳以上 65 歳未満

図 5 臓器別にみた全身的合併症の既往 (%)

図 6 質問項目に対する回答状況 (%)

の層と比べても、循環器系疾患の割合が多かった。

疾患名別に集計した結果は、疾患名とともにその患者数を表 2 に示した。

表 3 に健康調査表での患者の自覚症状を記入する項目の一覧を示している。この質問に対して、1 つでも「はい」と回答した者と、すべての質問に「いいえ」と回答した者、質問に対して回答のなかった者の 3 群に分けた。また、不明の 48 名を除いて、患者を全身的既往歴のある者となない者の 2 群に分けて集計し、その結果を図 6 に示した。

IV. 考 察

初診時の一般的診査を補助するために問診表を利用することは有効であり、大学病院だけでなく一般開業医においても広く利用されている。今回、その問診表と初診患者に対して行われる問診のカルテへの記載を対象として調査を行った。補綴治療を主訴として来院してきた

表 2 疾患名別の集計

() 内の割合は各年代層における疾患の割合

● 40 歳未満		
① アレルギー	25 名	(13.7%)
② 口蓋裂	12 名	(6.6%)
③ 貧血、蕁麻疹	11 名	(6.0%)
● 40 歳以上 65 歳未満		
① 胃・十二指腸潰瘍	44 名	(16.1%)
② 高血圧	35 名	(12.8%)
③ アレルギー	32 名	(11.7%)
● 65 歳以上		
① 高血圧	23 名	(22.3%)
② 胃・十二指腸潰瘍	20 名	(19.4%)
③ アレルギー	12 名	(11.7%)

表 3 自覚症状に関する質問項目

次のようなことに気づいたことがありますか。あれば該当のものを○で囲んで下さい。

1) 胸が痛くなることがありますか	はい	いいえ
2) 階段の上り下りで息切れがしますか	はい	いいえ
3) 心臓の鼓動 (動悸) が気になりますか	はい	いいえ
4) 目まい、立ちくらみを起こすことがありますか	はい	いいえ
5) 手足のしびれ、耳鳴りはありますか	はい	いいえ
6) 夜間のどがかわいて水を飲みたくなりますか	はい	いいえ
7) 夜間に頻繁に小便がしたくなりますか	はい	いいえ
8) 咳がよく出ますか	はい	いいえ
9) ひどくつかれやすいですか	はい	いいえ

全患者に対して、血液検査などの内科的疾患のスクリーニングテストを必須とすることは實際上不可能であり、補綴科として入手可能な情報は主として問診からであろうと考えられる。

本学附属病院全体の受診患者群¹⁾と比較して、今回の調査対象者の平均年齢は高い。その理由として処置内容の結果からみてもわかるように、有床義歯患者が多いといふところに起因していると考えられる。

手術経験の有無の調査結果により、外科的疾患の既往歴があったかどうかはわかるが、当科受診患者の 3 名中 1 名の割合で手術経験があったことはかなりの高率であると思われる。

現在投薬中の患者の割合は、手術経験の有無の結果と比べて年齢差が認められた。65 歳以上の層では、他の年代層と比べて 2 倍以上の患者が現在医師から投薬されており、高齢者の補綴治療を始めるにあたっては、特に投薬の内容に注意する必要がある。歯科治療における薬物に関する注意として、全身状態に及ぼす副作用だけでなく

く、口腔内諸組織に及ぼす影響も考慮する必要がある²⁾。唾液腺に影響を及ぼす薬物では歯の喪失につながるという報告³⁾もあり、今回の調査でも、年齢の増加とともに投薬の割合が多くなっており、高齢者の歯科治療にあたってはこのような薬物の影響に注意する必要がある。今回の調査では薬物名までを調べることができなかったが、現在何を服用中であるかについても重要な診査項目となる。本調査結果からもわかるように、高齢者ほど複数の医療施設から投薬を受けている可能性が高く、その場合には新たな投薬には慎重に対処する必要がある。

当科における全身的合併症の既往を調べた結果では、各年代層において全国平均⁴⁾に比べて高い割合を示しているが、この理由の1つとして大学病院の補綴科という特殊性が考えられる。既往歴の内容としては年齢が低い層ではアレルギー、蕁麻疹が、また高齢者層では循環器系疾患が多く認められた。どちらも歯科治療上、注意を払う必要のある疾患であるが、このことと補綴治療とを関連づけて考えると、アレルギーや蕁麻疹などの既往のある患者に対しては、局所麻酔剤のショックなどに注意し、循環器系疾患を有する患者には可及的にストレスをかけないようにすることが望まれ、歯科で用いられる頻度の高い局所麻酔剤、圧排糸、止血剤などに含まれるアドレナリンの影響⁵⁾を考慮する必要がある。

40歳未満での疾患別の集計では口蓋裂が第2位となっている。本学附属病院では口蓋裂患者に対してチームアプローチを行っており、補綴治療が必要な患者は矯正治療が終了するまでに補綴科に紹介され矯正科担当医と治療計画を検討するシステムになっている。そのため、若年層に口蓋裂患者が集中する結果となったと思われる。

患者の自覚症状に関する健康調査表への記入と全身的合併症との関連を調べた結果では、著者らが提示した質問項目に対してすべて「いいえ」と答えたにもかかわらず、その後の問診などで23.3%の患者が全身的合併症

の既往があったと答えている。逆に、44.8%の患者がなんらかの自覚症状を感じているが、特に全身的合併症の既往が認められなかった。このことは健康調査表のみで患者の全身状態を評価することの危険性を示すとともに、全身状態を的確に把握するために必要な自覚症状に対する質問項目の設定の困難さを示している。

V. まとめ

補綴科のように患者の年齢が比較的高い診療科では、年代層別にみると高齢者における全身的合併症の既往が顕著であり、歯科治療にあたる際には十分な問診を行い、全身状態を把握した上で診療を行う必要のあることが示された。

本論文の要旨は第82回日本補綴歯科学会学術大会(平成元年10月21, 22日, 横須賀)にて発表した。

文 献

- 1) 作田正義, 阿久根正之, 中沢光博ほか: 大阪大学歯学部附属病院における「健康調査表」の利用状況, 阪大歯学誌, 32: 470~476, 1987.
- 2) Baker, K.A. and Ettinger, R.L.: Intra-oral effects of drugs in elderly persons, Gerodontics, 1: 111~116, 1985.
- 3) Ettinger, R.L.: Tooth loss in an overdenture population, J Prosthet Dent, 60: 459~462, 1988.
- 4) 厚生統計協会編: 厚生指標(臨時増刊)国民衛生の動向, 82~87, 厚生統計協会, 東京, 1987.
- 5) Buchanan, W.T. and Thayer, K.E.: Systemic effects of epinephrine-impregnated retraction cord in fixed partial denture prosthodontics, J Am Dent Assoc, 104: 482~484, 1982.